

原作・第3.5話

## 聖剣の曲芸師

アクロバットスター

著・三浦勇雄  
イラスト・屢那

1

工房『リーザ』は母屋と鍛冶場の二軒から成り、独立交易都市の公的農地である七番街と火山灰を被った白い森、それらの間隙に位置する。頭上の天空は森を境に、空の青と灰の白の二色に割れており、都市側から森の向こう側を望めば、灰色にけふる空の中に火山の稜線がうっすらと見える。

工房には親方である青年とその助手の少女がふたりで暮らしている。暖かな日中には決まって屋外に小さな卓と椅子を並べて昼食を取るといのがふたりの習慣——主に助手の趣味——だったが、近頃その席には彼ら以外の顔ぶれが並ぶようになっていた。

夏を目前とした時節。

和やかに注ぐ陽射しと爽やかに渡る風の中、食卓の上には出来立ての蒸かし芋が山盛りで湯気を立てている。傍らに添えられているのはさつと茹でて軽く塩味をつけた野草。

卓を囲むのは四人。

そのうちのひとりが思い出したように切り出した。

「そういえば大道芸団が来るぞ」

燃えるような赤い髪と瞳を持った女騎士、セシリー・キャンベルである。歳は十六。白を基調とした制服と首許のペンダントはいずれも独立交易都市公務員自衛騎士団の所属を示す証だ。

「大道芸団、ですか？」

訊き返したのはセシリーの斜向かいに座っていた少女——リサだ。

リサはこの工房『リーザ』で助手として働いている。午前中も鍛冶場仕事に追われていたらしく、彼女の着

る作業着には真新しい汚れが見られ、後ろで束ねたブロードの髪もわずかに炭の煤を被っていた。フォークを片手に小首を傾げる少女に、セシリーは言った。

「大陸中の国家を渡り歩く大道芸の一团らしい。近々この都市を訪れるとこのことで自衛騎士団に彼らの護衛依頼が来ている。私も噂程度にしか知らないんだが、素晴らしい芸の数々を持っていて、中には剣舞に優れた曲芸師もいるとのことだ。他にも彼は猛獣の扱いにも長けているだとか」

生来が好奇心の旺盛なりサは「素晴らしい芸の数々」の件で瞳を輝かせたけれど、すぐに目尻を落とした。「とつても面白そうですけど……大丈夫なんですか？ この前の『市』であのような事件が起こったばかりですよ」

「だからこそ、なのさ。もちろん事件そのものを忘れてはいけませんが、せめてその落ち込んだ空気を吹き飛ばそうというのが目的なんだ。市民も彼らの訪問に合わせて臨時の祭りの準備に奔走している」

「そうそう、だから大通りなんて、ふえ、熱っ、すごふ賑わっ、すごふ熱い！」

セシリーの隣で、熱々の蒸かし芋を四苦八苦しながら頬張っているのは栗色の髪をした女性だ。名はアリア。踊り子のような格好をした彼女は『市』での事件以来、セシリーの相棒を務めている。

彼女は自分の胸を叩きながらりサの用意した茶で蒸かし芋を飲み込み、ほっと息をついた。

ごめんごめんと手を振って、

「えっとそれでね、当日の警備は自衛騎士団が担当するんだけど、あたしとセシリーはその日はお休みをもらってるの」

「私は右手の火傷がまだ治りかけだからな。残念ながら警備の役には立てない」

セシリーは包帯の巻かれた右手を示す。火傷は『市』の事件で負ったもので、後遺症の問題は無いがまだ完

全には回復していない。今もフォークは左手で扱っていた。

「それだ。大道芸団の見物にりサとルークもお誘いしようかと思うんだ」

「わ、私たちですか？」

「ああ。『市』のときにはふたりにとっても助けられた。そのお礼と言うのも変だが……団長が特別に計らってくれたんだ。客席は四人分用意されている」

「行こうよりサ！ きつと楽しいよ！」

身を乗り出すアリアに、目を瞬いていたりサは徐々に頬を紅潮させていった。興奮に鼻の穴を広げ、威勢よく頷きかけたところでしかし動きを止めた。

恐る恐る隣を見やり、親方の顔色を窺う。

「ル、ルークは……？」

一同の視線が黒髪の青年に集中した。

ルーク・エインズワースである。りサと同じ作業着を着た彼は、隻眼でしかも十七という若さながら工房『リーザ』の親方を務めている。

会話にも加わらず、ルークは面白くも無さそうに己の取り皿に盛った蒸かし芋をフォークの切っ先で突いていた。右目でりサ、アリア、セシリーの順に見回す。

三人の視線に促され、嘆息交じりに答えた。

「止めはしない」

りサの表情が輝き、

「だが俺は遠慮させてもらう」

途端に曇る。

セシリーがむっとしたように問うた。

「どうして」

「興味が無い。三人で勝手に行ってくれ」

でもでも、と気を取り直したりサが言った。

「有名な剣の曲芸師さんがいるんですよね？ だったらルークだって見るものが無いわけじゃ——」

「お前は」

片腕で頬杖ほおづえを突きながら、ルークは無愛想に告げた。

「見世物の剣技と俺の腕、どちらが上だと思う」

「……ですよね」

しゅん、とりサは肩を落とす。

彼女は顔を見合わせたセシリーとアリアに気がつき、説明してくれた。

「鍛冶屋かじやたる者、あらゆる武具の扱いに精通していなくてはならない——というのが先代の親方さんの教えだったそうです。ルークは今もその教えを頑かたくなに守っていて、だからそこいらの剣士さんや戦士さんにも負けないんです」

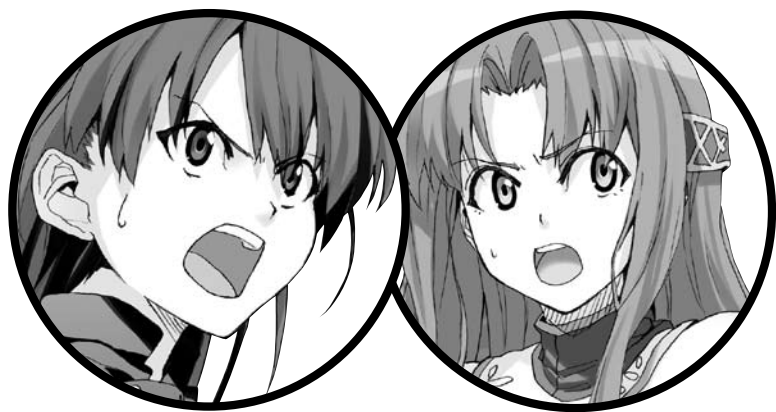
簡単に言うが……。セシリーは再度アリアと顔を見合わせた。

自分たちはルークの人外や悪魔との立ち回りを何度か目の当たりにしている。だから彼の腕のほどを知らないわけではなかったけれど——相手の腕も見えていないのに大した自信である。知り合って一ヶ月ほどになるが、彼に関しては未だ計りかねるところが多い。

「でも私、どうせならルークも一緒に……」

「くどいぞ」

ぴしゃりと言われ、リサはうつむいた。



つづきはBLASMIX **1** Vol.1 で  
お楽しみください。